日本基督教団
柿ノ木坂教会

牧　　師　渡邊　義彦
協力牧師　松下　恭規

教 会 報

200 号 2020 年 12 月 6 日

〒152-0022
東京都目黒区柿の木坂
1-31-19
電話：03-3717-3870
Fax：03-3717-3916

「嘆き悲しむことのないように」

―テサロニケの信徒への手紙一第４章１３節―

牧師　渡邊　義彦

兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。　（新共同訳聖書）

「嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい」と言って、使徒が語るのは、主キリストが再び来てくださる日のことです。キリストが結んでくださった約束が果たされる日のことです。その日にはあらゆる悲しみが終わりを告げ、あらゆる涙が拭われます。その日、世界のすべての苦しみ、悲しみが終わりを宣告されます。

使徒パウロは、キリストが再び来てくださることへの切迫した期待の中で生きています。この期待が「主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません」と語ることや、「キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます」といった言葉で表現されています。パウロは、キリストが再び来てくださるときに自分は生きていて、主にお会いすると信じていたことがこの言葉からわかります。テサロニケ教会の兄弟姉妹たち、教会員たちも、パウロと同じ期待に、主イエスはすぐにでもわたしたちのもとに帰って来てくださる、という差し迫った期待を持っていたはずです。

けれども、ここで使徒が念を押すように「次のことは知っておいてほしい。述べた言葉で励まし合ってもらいたい」と告げるのは、なお信仰における大切な点を伝えておかなくてはならないと考えたからでしょう。この点について信仰が揺らぐならば一切が無駄になると考えたからだと思うのです。テサロニケ教会が信仰に揺らぎを来していたとするならば二つのことが考えられます。一つは、復活の信仰が疑わしくなったということです。今一つは、キリストがもう帰ってこないのではないかという再臨に対する疑いです。

復活の信仰が揺らいだということは、キリストが十字架の死の後、アリマタヤのヨセフの墓に葬られ、週の初めの日に復活なさったことを信じられなくなったということと、そして同時に、わたしたちの復活も信じられなくなったということです。復活信仰は、キリスト教信仰の要とも言える信仰内容です。キリストを信じる教会だけが大胆に世界に語り伝えることのできる信仰箇条です。この復活信仰においてテサロニケ教会が重大な揺らぎを来していたので、もう一度、教会員たちに、キリストがわたしたちのために死んでくださったこと、キリストは死んだままではおられず、よみがえられて復活なさり、そして、復活の命に与る者としてわたしたちをキリスト者としてくださって、終わりの日によみがえらせてくださることを、兄弟姉妹たちにもう一度語って聞かせたのでしょう。

そして、パウロがここで念を押すように語るもう一つの理由は、兄弟姉妹たちがキリストはもう帰っていらっしゃらないのではないかと心配しはじめたのではないかということです。まるで目で見るかのように具体的に再臨されるキリストの様子を言葉を費やして語ることから、キリストがお出でになることを信じる生き生きとした信仰にパウロが生かされていたことがわかります。

使徒パウロがテサロニケ教会にこの手紙を送ったのは紀元５０年代前半と考えられています。主イエスが神の国の福音を伝道されて十字架と復活の御業を為さってから約２０年の年月が経っています。今日生まれた子供が成人するほどの月日が経って、天に昇られたキリストが帰ってこられるのは、今日か、明日かと教会は待ち続けてきました。主はもう帰ってお出でにはならないのではないか。そのような疑いも起こってきます。終末が遅れる。そもそも終わりの日などないのではないか。緊張がなくなり、慢心が起こり、期待が薄れ、疑い、不信仰に陥る。このことに、使徒は、いや違う、キリストは来られるとはっきりと告げるのです。

復活を疑うことも、終わりの日のキリストの来臨を疑うことも、結局は、わたしたちが等しく負っている死の課題を軽んじて、まるで問題ではないかのようにうそぶくか、またはその課題のあまりの重大さに絶望するかでしか対処できないのです。パウロが、ここで「希望を持たないほかの人々」と言うのは、死を軽んずるにしても、死に絶望するにしても、死の課題を真っ正面から見据えられない人々を指して言っています。生まれながらのわたしたちであれば、わたしたちも死を軽んじて強がりを言うか、または絶望し希望を失うかしか生きようがなかったでしょう。

けれども、パウロが、「嘆き悲しまないでほしい」と告げる言葉に続けるとおり、キリストが死なれたこと、復活されたこと、キリストを信じた者たちがたとえ死んでもキリストと共に生きること、よみがえりを与えられ永遠の命を生きることを信じることで、既に、わたしたちは死を克服しています。

死が既に克服されています。けれども、わたしたちの人生は、依然として肉の身体の滅び、土で造られたこの土の器である身体が再び土に還ってゆく日を目指して日々を生きています。しかし、この人生に絶望もしなければ、この人生を軽んじ軽蔑もしないのは、キリストが十字架の主でいてくださり、復活の主であられるからです。キリストゆえに、わたしたちは死を恐れず復活を信じることができます。キリストが再び来てくださる約束を信じて待つことができます。

キリストの来臨を待ち続けた使徒も、テサロニケ教会の兄弟姉妹たちも眠りにつきました。教会で礼拝を共にした兄弟姉妹たちにも既に眠りについた者たちがいます。あの兄弟、あの姉妹たちを思い起こします。彼らも皆、終わりの日にキリストが再び来てくださり死の眠りから呼び起こしてくださることを信じて眠りについたのです。キリストが十字架の主であること、キリストが復活の主であると信じて地上の人生を生きたのです。この聖書の言葉は、葬儀において読まれる聖書箇所の一つです。愛する者の死、そしてまた、自らの死に臨んで、終わりの日を待ち望む、キリストにお会いすることをほんとうに喜び待つ御言葉が、わたしたちの励ましとなり、支えてくれる言葉となるのです。

「嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。」「この言葉によって互いに励まし合いなさい。」

集会出席統計（月平均人数）

	2020年		
	8月	9月	10月
主日礼拝	53.4	76.3	75.8
聖書と祈り会	−	10.0	7.8
教会学校＊	62.4	81.5	84.3

＊保護者、教師を含む

（第1主日開催）	8月2日	9月6日	10月4日
聖餐夕礼拝	8	9	6

＜寄稿＞

「愛餐会」の意義

牧会委員会

今年もクリスマスが近づきました。例年なら礼拝後に「愛餐会」の時を持ちますが、今年はコロナ禍の影響で、例年通りの会を行ってよいのか、難しいところです。

そもそも、愛餐会はどういう意味を持つのでしょうか。このところ、少々マンネリになっていたり、参加者が限られたりしている現状もあり、「愛餐会はなぜ必要なのか」ということを改めて考える必要がありそうです。

そこで、牧会委員会では原島正兄を中心に勉強会を開き、愛餐会の意義について学びました。以下に原島正兄の発題を掲載します。是非ご一読ください。（石丸恵彦）

＊＊＊

私がいつも座右に置き、調べている『岩波キリスト教辞典』岩波書店から引用します。「会食」の項目に次のように記されています。

「会食は共同体の生命力や結束、参加するメンバーの出会いと親交の喜びを新たにするものとして祝祭的な意味を持っている。古代ユダヤ教では、過越祭や安息日の会食が宗教的意味をもち、家長はぶどう酒の杯を掲げて神を賛美する祈りを唱えた。」（193頁）

「福音書」によれば、主イエスはしばしば会食をしています。当時「罪人」と軽蔑された人たちと食事を共にすることは、主イエスの愛の実践でした。そして最後の晩餐で弟子たちに、パンとブドウ酒を取り「これは私の身体」「これは私の血」である、食べ、そして飲むようにと分かち与えて「私の記念としなさい」と言われました。この出来事が「聖餐式」として今日まで大切に守られています。

先の辞典によれば、「聖餐が純然たる典礼儀式として発達する一方、信者同士が実際に食事をすることで霊的親睦を深める会食はアガペー（愛餐）として受け継がれ」ました。ここで愛餐が「アガペー」として受け継がれた、と記されていることに正直、驚きました。「アガペー」とは、神の愛を表すギリシャ語で新約聖書での独特な用語だからです。そこで「アガペー」の項目を参照しますと（13—14頁）「特に受難において示された救済的恩恵・愛を意味する。」とあります。さらに【愛餐】として「キリスト者が兄弟愛の実践のため、特に貧しい人々を家庭に招いて催した夕方の会食のこと」と記されています。「初期のキリスト者の時代には、主の晩餐の記念（聖餐式）を行うための会食が存在していた」のですが、1世紀末から2世紀頃からは、聖餐式が会食と切り離されて「聖餐式は朝に行われていたのに対し、愛餐は夕方に行われていた」とのことです。けれども愛餐（アガペー）は4世紀頃からはあまり行われなくなり、8世紀には廃れてしまったようです。その理由については記されていません。毎日曜日の夕方に行われた食事会は、中止となったのかもしれません。

次に話題を変えて、私たち信徒の「交わり」について考えてみましょう。キリスト教は個人主義ではありません。もちろん、神様と私たちとの関係は、最優先されます。けれども、礼拝は、私たちが共に集い、共に御言葉に耳を傾け、共に讃美をします。たとえ、数人で礼拝を守るとしても、その背後には、すべての信徒が共にいます。

礼拝の最後は、牧師による祝祷です。

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。」（コリントの信徒への手紙二13章13節）

この祝祷は、一つの宣言でもあります。将来のことであるだけでなく、今ここで共に礼拝を守った私たちに現実となっている事柄の宣言です。注目したいのは「聖霊の交わり」です。その意味は「聖霊が交わってくださり、聖霊によってつくられた交わり」です。もちろん親睦のための交わりではありません。けれども、結果として信徒同士の親しさとなります。その親しさは、恵みです。共に礼拝を守った者同士、その方のお名前も知らないし、どのような方か全く知らないかもしれません。しかし、すでに聖霊による交わりが、そこに実現しています。その交わりは、今だけでなく将来も、共にあることへの祈りです。祝福の祈りです。その祈りに皆で「アーメン」(真に、そうなりますように)と唱和します。

さらに「使徒信条」の第三項目で「聖徒の交わり」を信じると告白します。「聖徒の交わり」とは、「聖なるものによって作られる交わりであり、聖なる者たちの交わり」でもあります。その意味しているところを「ハイデルベルク信仰問答」吉田隆訳で引用します。

問 55 「聖徒の交わり」について、あなたは何を理解していますか。

答　第一に、信徒は誰であれ、群れの一部として、主キリストとこの方のあらゆる富と賜物にあずかっている、ということ。

第二に、各自は自分の賜物を、他の部分の益と救いとのために、自発的に喜んで用いる責任があることをわきまえなければならない、ということです。

以上のことから、キリスト教は個人主義でないことをご理解いただけたと思います。神と私たちとの「縦のつながり」は、私たち同士の「横のつながり」でもあります。二つのつながりは、区別されるとしても、分離されてはいけません。

礼拝だけでよい、信徒の交わりは必要がないと考える方もいるかもしれません。礼拝は、たしかに神様を称え、讃美するときです。しかし礼拝は共に礼拝している者同士の交わりのときでもあります。聖餐はその交わり、そのものです。礼拝のなかで周囲の人と「挨拶」をする教会があります。交わりなくしてキリスト教の礼拝なしです。さらにその交わりは、礼拝のときだけではありません。礼拝最後の祝祷は「聖霊の交わり」が今も、後も、永遠にあることの祈りです。

もちろん「聖霊の交わり」は「愛餐」だけではありません。夕方に開催された「愛餐」は、行われなくなりました。けれどもクリスマスとイースターの礼拝後だけでも、皆で食事を共にしながら親睦を深めることができたらと思います。これも豊かなお恵みの一つです。主イエスが、しばしば食事を共にされたのは、私たちとの親しい交わりを望まれたからです。

最後に「愛餐」の持ち方について先の辞典に紹介されていますことを参考までに引用して終わりにします。

「ローマの司祭ヒッポリュトスの『使徒伝承』(215 年頃) の中に愛餐についての叙述が見られる。[25 - 30 章]。これによると臨席している司教 (不在の場合は司祭か助祭) がこのアガペーの会食の司式進行し、短い晩の祈りをしてから食事に移っていた。また食事中には饒舌や論争を避け、ふさわしい態度で感謝しながら飲食するように命じている。」(14 頁)

(原島正：
本稿は、2020 年 9 月 6 日に開かれた牧会委員会での発題の順序を変え、加筆したものです。)

＜シリーズ　私の聖書、私の讃美歌＞

聖書と讃美歌との出会い

葛（かつ）　沁芸（しんげい）

「『自分の分を受け取って帰りなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

マタイによる福音書20章14ー16節

私にとって、聖書との出会い、讃美歌との出会いは殆ど教会との出会いと同じで、柿ノ木坂教会に通い始めたタイミングと同じだったと思います。柿ノ木坂教会に来るようになって、12年程が経ちました。この短い時間の中ですので、思い出の聖句というよりは、もう少し現在進行形に近い最近のことかもしれませんが、心に響き続けている聖書の御言葉について、書かせていただくことにします。

2013年頃より教会学校の教師をさせていただくこととなりました。子供たちと一緒に守る礼拝、そして礼拝の前後に子供たちと交流することは楽しいものでしたが、教会学校に通ったこともなく、キリスト教の学校育ちでもなく、また教会員歴も浅い自分が、教会学校で説教をすることができるのか、御言葉の取次ぎかできるのか、という不安を抱えながら始めた務めでした。最初に説教の担当が回ってきたとき、渡邊先生に準備をご一緒にしていただいた際も、客観的な条件だけでなく、主観としてもとても出来そうにないと感じていて、不安な気持ちで一杯だったのを覚えています。

自分の資質と能力が足りているのかが、特に不安でした。自分の聖書理解は間違っていないだろうか。この聖書箇所の核心はどこなのだろうか。教案が与えられていて、参考にすることができるけれど、教案に引っ張られてしまうのも違う気がする…等々。自分の用いる言葉と、聖書の御言葉の間に大きな間隙があって、その間を行き来する方法が全くわからない、そんな気持ちでした。

そんな状況の中で、渡邊先生から教わったのは、「聖書」の御言葉にまず向き合うこと、の大切さでした。黙想することとは、神様から身体と心を与えられている自分自身を用いて、聖書と１：１で向き合うこと、説教準備とは、その黙想を基礎として、御言葉を心の中で反芻すること、なのかもしれません。

教会学校で説教をするときは、いつもとても緊張していましたが、その緊張の原因は、自分の力不足に心が捕らわれてしまうことだったのかもしれません。今回選びましたこの御言葉は、私にとって、救いは我々人間の間のそれぞれの「違い」や「ギャップ」を簡単に超えてしまうもの、聖霊の力は我々の不足を補って余りあるものだ、ということを、思い起こさせてくれるものでした。

私自身「後にいる者」なのか「先にいる者」なのか、わかりません。どちらでもあるのかもしれません。ただ、「先にいる者」と「後にいる者」とに共に気前よく支払ってあげたい、という御言葉は、教会学校の活動を考える中でも、とても大切な言葉だと思いました。御心の通り、「後にいる者」が多く与えられますように、そしてその者たちが「先」となりますように。そう願いたいと思っています。

教会学校で御言葉を取り継ぐ機会が与えられていることは、私にとってとても大きな恵みとなりました。これからも長い時間、教会生活を過ごしてゆく中で、人生の節目節目で、あるいは日常の中で、聖書の御言葉を味わい、再び出会いながら、日々を過ごすことができたらいいな、と願っています。

「パイプオルガン導入１年を経て」

奏楽者のみなさんのコメント（五十音順）

今私は2020年度三位一体後第３主日のテープを聴いています。この日の奏楽題は「今我らは聖霊を請い願う」ベーム曲。説教―「富める青年と主」松下恭規牧師。

コロナウイルス感染症の蔓延によってお披露目コンサートの叶わぬ状況下、楽器導入のアドヴァイザー役も担って下さった鷺晶子さんの特別伝道礼拝のご奉仕の録音です。今から３、４０年ほど前、当時は木田みな子先生による奏楽者の学びのクラスがこの礼拝堂で行われており、他教会教会員であった私も鷺さんのお誘いで参加した記憶があります。今後、当番の際の聖書個所に呼応する曲の選び方、音色の工夫、会堂での響き具合等、意見交換、情報交換の場があれば、と願っており、可能であれば誰方でも参加できる会の企画＝メカニズムのレクチャーを交えつつ聖霊の導きを渡邊先生に様々な切り口にて（例:詩編等講釈）講じて頂けたら嬉しいと思っております。

（石岡　美典子）

パイプオルガンとともに生きる

ある時期、あんなに好きだったオルガンをまったく弾くことができなくなってしまった。本当につらい時間であったが、神様は私を見捨てることはなさらなかった。パイプオルガンという楽器を与えられ、再び歩き出すことができるようになったからだ。

そんな矢先のコロナ時代突入だが、来る日も来る日も一人オルガンに向かうことによって私の中にある変化があらわれた。自分で弾いていることは確かに楽しいし嬉しい。だが、それで満足していてよいのか。私は音楽の知識も技術も不足しているし、楽曲を指導することもできないが、志のある人々に少しだけオルガンの先輩として手を差しのべてみたい。自分の体調が危ぶまれる中、強くそう感じるようになった。

パイプオルガンも生き物である。日々成長している。調子のよい日もあれば、愚図るときもある。弾く人によって、また聴く人によって、聴こえてくる音も違うと思う。奏楽者各人が自分のよいところを大切にし、御心に適った奉仕ができたら素晴らしい。そんなことを考え、祈りながら、今日も私は黙々とオルガンに向き合っているのである。

（清水　ひとみ）

新型コロナ感染症を注意して、私は礼拝出席を控えていた時期もありましたが、その間も変わりなく奏楽奉仕が続けられました事、本当に感謝です。

オルガン使用ノートを見ましても、本当に良くオルガンが使われています。

コンサート等、外に対して呼びかける事はしばらく叶いそうもありません。

マスク無しで思いっきり賛美できる日が待ち遠しいです。

また、新しい奏楽奉仕者、特に教会学校の子供たちから出て来る事を、切望しています。

（棟居　湘子）

オルガンが導入されて１年。さほどの故障もなく毎週毎週礼拝で使われていることに感謝です。コロナ禍で社会が大きく変動する１年となるとは思いませんでした。大きな声で讃美歌を歌うことが難しく、コンサートも延期されましたが、「♪歌の声は小さくても喜びなさる神様」（子ども讃美歌）を信頼しつつ祈った半年でした。特に自粛が続き、不安の大きかった時、毎週の礼拝

は生の音楽に触れることのできる貴重な時で、大いに癒されました。16 世紀、17 世紀のヨーロッパでは、人々は毎週の礼拝で演奏される音楽を心待ちにし、教会音楽が大きく花開きました。コロナは音楽史にどのような影響を与えるのでしょうか。ところで・・・オルガンは誰でも弾ける楽器です。まだ触ったことがない方、ぜひ、鍵盤一つだけでも、音を鳴らしてみましょう。調律をする人も募集中です。「音楽的素養」は必要ありません。特に理系好きな方たちには面白いそうです。お待ちしています！

（渡辺久子）

☆☆☆ 教会の行事 ☆☆☆

◇今まであったこと

＊行事ではないが、コロナ対応で、礼拝出席ができない方々のために、説教原稿のメールによる配信、郵送が継続して行われている。

＊９月 27 日の主日礼拝は、例年通り高齢の方々に配慮した礼拝とし、聖餐夕礼拝の式順序に短縮して聖餐執行を含めて１時間以内の礼拝とした。

＊コロナ対応で、礼拝出席ができない方々で訪問聖餐を希望される方々に、申し出をしていだいた。

＊11 月 1 日の主日礼拝は、例年通り、聖徒の日記念礼拝とし、この１年の内に亡くなった教会員のご遺族を招いた礼拝とした。
なお、コロナ対応のため、例年階下園舎で行われる、ご遺族を囲んだ偲ぶ会は中止され、礼拝後にご遺族を紹介するのにとどめた。

＊11 月 22 日　ＳＣの収穫感謝日礼拝

＊11 月 29 日　アドベントに入った。

◇これからの予定

＊12 月　2 日（水）13：30～　新生会・いずみ会　アドベントの集い

＊12 月 20 日（日）　9：00～　教会学校幼稚科クリスマス礼拝
10：30～　クリスマス主日礼拝（聖餐が行われます）
午後　教会学校　小学科・JC クリスマス礼拝

＊12 月 24 日（水）19：00～　聖夜礼拝

今月のメッセージ
――ホームページページ巻頭言――

ホームページには多くの情報が掲載されています。
ぜひご覧ください
http://kakinokizaka-church.com

わが子よ、主の諭しを拒むな。
主の懲らしめを避けるな。
かわいい息子を懲らしめる父のように
主は愛する者を懲らしめられる。
（新共同訳聖書・箴言第 3 章 11～12 節）

11 月第一の主日には聖徒の日記念礼拝を献げました。逝去した教会員を覚えつつ、彼ら、彼女たちに救いの御業を現わしてくださった主なる神をたたえる礼拝でした。柿ノ木坂教会の逝去者名簿には、これまで 223 名の名前が記されてきました。85 年になろうとする教会の歴史の中で主のもとに召された兄弟姉妹たちです。

この名簿の一番はじめに記されている兄弟は、1945 年 3 月 10 日が逝去日です。先の戦争、東京の空襲の中で兄弟が召されたことを教会の五十年記念誌は伝えてくれています。戦争、そして戦後の混乱期を経験した兄弟姉妹たちがなお礼拝に集っています。そのときの苦しみを、困難を戦後生まれの者は想像するだけです。

この春からの歩みは、教会の生活においても、日々の生活においても、多くの、そして新しい困難に直面する日々でした。礼拝に集うことができない。学校や幼稚園、保育園に行くことができない。出社することができない。楽しみであった趣味の集いに集まれない。日常のあらゆることが自粛、手洗い、マスク、新しい生活の様式、ウィルスとの共存のための模索。世界の往来がはるかに容易になった現代、感染症は瞬く間にどこにも逃れることができない世界規模の苦しみとなりました。

ウィルスの発見からもうすぐ一年になろうとする、これまでの日々をもう一度思い起こしてみると、確かに社会や生活に混乱はあったものの、また健康が脅かされるようなことが少なからずあったものの、食べ物に事欠いたり、家が失われてしまったりということではありませんでした。制限はあるものの、その中で、これまでの日常と新しい日常とどう折り合いをつけてゆくのかという、ある面、破壊的ではなく創造的な生活でもあったと思えるのです。戦争の破壊的な苦しみとは違う、産みの苦しみなのかもしれないとも思うのです。

教会も、これまでの礼拝を献げ続けることに祈りをあわせてきました。しかし、その中で、なお礼拝に集うことができない兄弟姉妹たちへの牧会的なアプローチをブラッシュアップすることがありました。教会学校の子供達への、保護者の方々への伝道も弱まることはありませんでした。この困難な中で、洗礼を望み、信仰告白を望む人たちが途切れることなく起こされてきたことは、主の御業であるとたたえなくてはなりません。

戦禍においても信仰の、教会の灯を消さなかった先達に教えられ、わたしたちも託された道のりを歩み通さなくてはならないと改めて思います。

主が、この歩みを導いてくださり、助けてくださるように祈るものです。

（牧師　渡邊　義彦）

―――編集後記―――

・牧会委員会から「牧会」について、寄稿をいただきました。先号に続いて教会の大切な技を改めて考えることができ、感謝いたします。

・パイプオルガン建造後 1 年が経ちました。礼拝がどのように変わってきているのか、知りたいところです。まずは、奏楽者のみなさまの声をお聞きしました。

・11 月 1 日の聖徒の日記念礼拝には、この 1 年間に天に召された方々の信仰の旅路を思い、その方々の生前の教会でのお働きに改めて思いをはせました。

・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。

（編集委員長　井澤浩一）

集会案内

主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分
聖餐夕礼拝　第 1 日曜日　午後 5 時
入門講座　日曜日　午前 9 時 30 分
教会学校　日曜日　午前 9 時
（幼稚科、小学科、ジュニアチャーチ）
＊ジュニアチャーチは中学生、高校生です。
聖書と祈り会　水曜日午前 10 時、午後 7 時 30 分

日本基督教団　柿ノ木坂教会
〒152-0022　東京都目黒区柿の木坂 1-31-19
電話　03-3717-3870（教会・牧師館）
03-3723-3870（ベテル幼稚園）
牧 師　渡邊　義彦
協力牧師　松下　恭規